▼講演原稿

医学による啓蒙、アルコール依存および酒造業界に関する考察

――一九〇〇―一九一八年ドイツ――

ミヒャエル・ハウ
（訳：服部　いつみ／服部　伸）

はじめに、私がドイツにおけるアルコール依存の歴史の研究に取り組むようになった経緯について述べよう。

私は医学史が専門なので、本研究テーマは私の専門からそれほど離れていない。以前の研究テーマは、ドイツ帝政期とワイマール時代の健康改善に関するものだったが、そこでもやはり、学校医学と、いわゆる生改革運動の一環と位置付けられることの多いオルタナティヴ医療運動との対立についての考察を行った[2]。

生改革運動の信奉者の多くは、近代の文明化された人間が、工業化以来、「自然な」生活環境から遠ざかってしまったがゆえに文明の進歩による退化に直面している、と考えていた。自然療法運動や、菜食主義や裸体主義のような健康に関する取り組みは、こうした退化の動きに歯止めをかけようと、自然に即した生活様式を提唱した。つまり、文明人の進歩的退化を食い止めるには、健康に悪いものをすべて排除して生活するしかないと主張したのだった。菜食主義者の比較的小さなグループなどは、その一環として肉の摂取を拒否したが、こうした行為はすべての生改革運動家に当てはまるものではない。一方で生改革運動家たちの多くは、タバコや酒といった、いわゆる有害な嗜好品を断つことを推奨した。この点に関しては当然ながら、学校医学と他の改革運動の間に、節制した飲酒［以下では「節酒」と訳出する、訳者補足］か、あるいは完全な禁酒かのいずれかを支持するという共通点が存在した[3]。このように、ドイツのアルコール依存に関する私の研究は、ここ数年少し遠ざかっていたテーマである一八九〇年から一九三〇年に普及した健康文化に関する研究とある意味ではつながっているのである。

アルコールに関する研究は、私の最新の研究、つまり一九〇〇年から一九四五年のドイツにおける生政治と能率向上についての論争に関する研究ともいくつか接点が見られる[4]。この研究では、ドイツ国民の勤労意欲と作業能率を身体と精神の両面において向上させるといった、ドイツのエリート層と政府による生政治的な試みを取り上げた。それは主にスポーツや体育（Leibesübungen）の普及を通して行われ、第一次世界大戦敗戦後の国民の健康、身体能力、労働意欲を回復させることを目的とした。現状以上のさらなる障害は何としてでも予防しなくてはならず、そのために社会衛生家の多くがアルコール依存の引き起こす弊害につい

ても警告した。

したがって、デュッセルドルフ（一九二六）とドレスデン（一九三〇～一九三一）で開催されたドイツの衛生博覧会では、飲酒が人間の作業能率を低下させるということへの警告が重大な関心事であった。すでに第一次世界大戦前の一九一一年にドレスデンで開催され、五〇〇万人が来場した初の大きな衛生博覧会［ドレスデン国際衛生博覧会、訳者補足］では、「アルコール依存と国民の健康」と題した学術的な特別展が開かれ、飲酒がとりわけ「労働の質の低下」を招くと説いた。[5] このようにアルコール依存の歴史に関する本研究は、これまでの関連する私の諸研究の多様な観点を総合したものとなる。

この研究枠組の中では、飲酒に批判的な医師たちと、ドイツの酒造業界の利益を守ろうとしたロビー団体との間の摩擦について考察もしていくことになる。酒造業界の各団体は、飲酒による健康被害を公に弾劾した反飲酒派の運動に対して、その評判を落とそうと、一九〇〇年以降に広報活動を行った。このような酒造業界の利益団体には、反飲酒派に対してビール醸造所やビールを擁護したドイツビール醸造業連盟（Deutche Brauer-Union）も含まれた。それに対して、第一次世界大戦の頃の酒造業界で最も活発に活動を行っていたのは、「過剰な禁酒運動に対するドイツ抵抗連盟（Deutscher Abwehrbund gegen die Ausschreitungen der Abstinenzbewegung）」という大層な名前がついた連盟であった。この団体は、反飲酒派への論駁を、効果的に世間に訴えかけ、反飲酒派の医師たちの活動を弱体化させようと、陰でロビー活動を行った。

そのロビー活動とはいったいどのようなものだったのかを、ビール醸造業会誌の引用から見てみよう。

［禁酒運動は、］**自発的**な禁酒の原則に代わって、**強制**の原則、暴力的な禁酒の原則を求めている。つまり、ありとあらゆるアルコール飲料の製造、販売、消費が全国的に禁止されるのである。それはまさに酒造業者あるいは消費者全体に対する、政治的な圧力による強制に他ならない。[6]

こうして酒造業界は、禁酒という妖怪に脅かされることになった。これまでドイツでは決して本気では検討されなかった禁酒という措置が、こうした状況下、酒を楽しく酌み交わすという素晴らしいドイツの伝統を脅かす強制として姿を現すことになったのである。[7] 同時に、禁酒運動は警察国家による抑圧に接近していったが、それによって酒造業界は官治国において国民の自由を擁護する立場となった。伝統を守ろうという訴えと独裁的な警察国家に対するリベラルな人権擁護は、それが自らの利益にかなう限り、互いに協力し合ったのである。

［禁止は］政治的な圧力によって強制しようとするものである。警察国家では、偽装や密告や不自然な圧力に満ちた生活が鼓吹される。[8]

もっとも、ここで次のような疑問が起こる。ドイツの酒造業界は、飲酒の制限や規制といった政治的な要求に対してなぜここまでヒステリックに反応したのだろうか。（酒造業界がたびたび示唆してきたように、当時の議論は大抵の場合、禁止ではなく規制をめぐるものであった。）確かに当時、禁酒運動は拡大しつつあり、それにはグッドテンプラー（第一次世界大戦前に会員数六万人）が大きな役割を果たしていた。さらに、プロテスタント系の青十字会（Blaue Kreuz）、カトリック系の十字同盟

(Kreuzbündnis) といった強力な教会関連組織も存在し、また鉄道、郵便、電信局員などの職業団体ごとに組織された多数の小規模な集団もアルコール抜きの社交を推奨した。こうした団体は第一次世界大戦前には七〇を数え、会員数は四〇万人にも及んだ[9]。そこにさらに大きな影響力を示したのが、前述の生改革運動であった。しかしながら、こうしたさまざまな運動は実際、酒造業界がそれほどまでに敏感に反応しなければならないほど大きな脅威だったのだろうか。

たしかに、禁酒運動自体はそれほど大きな問題ではなかった。酒造業界が第一次世界大戦前に脅威を感じたのには政治的理由があった。それは様々な政治的立場からの脅威にさらされるということであった。

一九〇九年に社会民主党の呼びかけから起きたシュナプスボイコット運動もその一つであった。このボイコット運動はもともと反飲酒を目的としたわけでなく、新たに導入された消費税への反対に端を発した。新税の導入により低所得者層の負担は増えたが、その一方でシュナプス製造者であるプロイセンの大地主たちは相変わらず税が優遇されていた。このキャンペーンが追い風になり、反飲酒派たちは労働者の飲酒への反対運動をいっそう激化させた[10]。

さらに、政治的および社会的に正反対の立場からも一層激しい批判があった。一九一〇年に、皇帝ヴィルヘルム二世がミュルヴィク (Mürwik) にある海軍幼年学校 (Marinekadettenanstalt) の生徒たちを前に行った演説は大きな反響を呼び、反飲酒派は再三にわたってこれを引用した[11]。演説の中で皇帝は、海軍将校たちが飲酒により健康、作業能率、神経にダメージを受け、勤務の負担に耐えられなくなったことへの憂慮を次のように語った。

> いざという時に機敏に動けるように、平時にあっても張り詰めた緊張を持続する、これが諸君たちにとっては重要である。次なる戦争、次なる海戦では、諸君の健康な神経が求められている。勝敗は神経によって決まるのだ。神経は酒によってむしばまれ、若いころからの飲酒によって危険にさらされている。[…] アルコール消費量が最も少ない国が勝利するのだ[12]。

皇帝にとって禁酒は、まるでドイツが世界の覇権を握るための条件であるかのようである。ドイツ国民の消費行動全体に変化が見られ、一九〇〇年からは実際にアルコール消費量が減少したという事実は、酒造業界にとって、もはや看過することのできない問題であった。ここで数字を並べ立てて皆さんを退屈させたくはないのだが、ざっくり述べるとアルコール度数の高いシュナプスの消費量は一九〇〇年までに激減したが、アルコール度数がそれほど高くないワインやビールの消費量は同時期にかなり増えた。当時は、ベルリンのシュルトハイス醸造所のようなドイツの大規模なビール醸造所の数が増え、小規模なビール製造会社や小売店を駆逐していた。こうしたプロセスはグスタフ・シュトレーゼマンのベルリンの瓶ビール商に関する博士論文に詳しく論じられている[13]。(シュトレーゼマンは国民自由党の指導的政治家で、ワイマール共和国で外務大臣と帝国宰相を務めた。)

しかしながらビール業界の好景気は、シュナプス製造業者ほどひどい状況ではなかったものの、そう長くは続かなかった。一八九六年から一九一〇年にかけて、シュナプスの一人あたりの消費量は二四%、ビールは七・六%落ち込んだ。こうした消費量の落ち込みは、酒造業界にとって、もちろん憂慮すべき問題であった。業界は、中間層と労働者の生

活レベルが向上するに従ってアルコール以外の消費の支出が増加したという消費行動の変化には注目していたが、禁酒および節酒の動きにはそこまで関心を向けていなかったと思われる。[14]

酒造業界の代表者たちは、こうした困難な状況の原因が禁酒および節酒運動の煽動にあると考えるようになった。そこで、適度な飲酒は無害であることを証明するために、医学上あるいは健康上の論拠を挙げて、反飲酒運動で著名な医学的代弁者の信用を傷つけようとした。これには、反飲酒運動において最も高く評価されていた点が、全面的な禁酒の推奨ではなく、適度な飲酒を推奨した点であったことも好都合に働いた。ドイツ酒類乱用防止協会（Deutsche Verein gegen den Mißbrauch geistiger Getränke）がその最もよい例であろう。この協会は、もともと安価な火酒の摂取反対を訴えていたが、それとは別にアルコール飲料の適度な摂取も唱導していた。エリートの名士たちからなる団体で、官庁や地方のエリートたちとの人脈も豊富だった。禁酒ではなく適量の飲酒を理想とすることに固執したので、禁酒を提唱する人々との間で摩擦が生じた。その摩擦を酒造業界は利用しようとしたのである。[15]

禁酒はもちろん明確であった。だが「適量の飲酒」とはいったい何を指すのだろうか。見解の相違は広範囲に及んだ。歴史家のハッソ・スポーデによると、飲酒の上限を、ビール一日当たり三分の一リットルまでとしていた人々もいれば、軽いワインかビールを二リットルまでとしていた人々もいた。[16] 後者はビール醸造業にとって好ましかった。ビール醸造業の連盟の見解は、醸造所の労働者は三〜五リットル程度のビールを毎日飲んでも健康を害することはないというものであった。[17] 過剰な飲酒に対する懸念は、醸造業者から見れば、禁酒運動によってあおられたヒステリーが原因であった。

ライバルである反飲酒派と同様に、酒造業の圧力団体も医学的論拠を持ち出し、飲酒は無害であるだけでなく健康へのプラス効果もあり得るとライバルとは逆の主張をした。この議論のパターンを以下の二つの例で見てみよう。

① 感染症とアルコール依存の関係をめぐる医学的論争
② アルコールは労働者の食事にとって重要なファクターかという論争

帝政ドイツの大学における飲酒の習慣に通じていれば驚く必要もないだろうが、医師や医学生の多くは、反飲酒派に対して飲酒を擁護するか、少なくとも飲酒は有害だとする反飲酒派の主張は大げさだと考えていた。ドイツの学生の付き合いの中では、過度な飲酒が重要だった。それゆえ酒造業界の擁護者が、医師や医学生による飲酒支持に関する見解を大量に引用することもたやすかった。[18] 例えば「過剰な禁酒運動に対する抵抗連盟」が配布したチラシには、行き過ぎた禁酒運動への非難や、適度な飲酒の安全性に関する解説など、多くの大学教授らの見解が引用されていた。[19] 抵抗連盟は、そうした観点から、禁酒派の「あり得ない誇張」を弾劾し、飲酒の痛風、肥満、糖尿病への関与は立証されておらず、むしろ糖尿病には飲酒によるプラスの効果も証明されていると主張した。[20]

とりわけ感染症の感染と経過への飲酒の影響については実証されていないとし、飲酒によって結核症を予防できるとの指摘すらあった。『アルコール依存は結核の予防薬になり得ないか（*Sollte nicht doch der Alkoholismus ein Schutzmittel gegen Tuberkulose sein?*）』。抵抗連盟はパンフレットの表紙にこのような問いを掲げ、それに力強く「なり得る（Ja）」

と答えている。[21]（ここでいう「アルコール依存」は、もちろん抵抗連盟も良くないと考えている、過剰な飲酒による病的な結果の複合体全体をさしているのではなく、単に相当量のアルコールを定期的に摂取するという意味で使われている。）抵抗連盟のパンフレットは、ヨハネス・オルトの論文に依拠していた。オルトはベルリン大学で病理学を教えていて、ルドルフ・フィルヒョウの後任だった。[22]（フィルヒョウは、一九世紀の最も著名なドイツの医学者の一人である。）抵抗同盟にとってはこれ以上望めないほど著名な支持者だった。

オルトは、過剰な飲酒と結核症の罹患率および死亡率との関連性に異論を唱えた。その論拠となったのは、一つにはライプツィヒ地域疾病金庫が行った統計調査で、帝国保険局が一九一〇年に公表したものであり、もう一つはオルト自身が自分の研究所で行ったアルコール依存者二一八例の死体解剖であった。どちらの調査も、アルコール依存者は非アルコール依存者より結核症にかかる率が低いという結果を示した。オルトによれば、この結果はもちろん「結核症を予防するには大いに酒を飲まなければならない」といっているのではない。なぜなら過剰な飲酒は他の危険性をはらんでいる可能性があったからである。それにもかかわらず、オルトの研究成果は「抗結核薬として大いに酒を飲んでよい」ということを示すこととなった。[23]

抵抗連盟の酒造ロビイストたちにとって、オルトの研究成果は、むろん待ちに待った美味しい話であった。抵抗連盟は、アルコールの大量投与という古式ゆかしい医療行為が結核症に有効な治療法であるとの裏付けを得て、アルコール依存は確かに結核症の予防薬であると結論づけたのである。[24]

酒造ロビイストは、自分たちの見解とぴったり一致するような研究成果を見いだした。だがその一方で、反飲酒派の著名な医学者たちがあたかも飲酒は大して有害ではないと認めたかのように、彼らの発言を曲解した。マックス・フォン・グルーバー（ミュンヘン大学の衛生学の教授）とその同僚で著名な精神科医であるエミール・クレペリンの場合も同様であった。彼らはアルコールによる健康被害を理由に禁酒を促した。

フォン・グルーバーは、酒が労働者階級の重要な栄養源であるという当時流布していた議論を論破しようと試みた。一九一一年、彼はグッドテンプラーの会議で講演し、講演の内容は主催者によってまとめられ、九五〇以上の新聞社に送られた。講演は酒の栄養価に関するものであったが、これは酒が労働者の栄養状態と健康状態に悪化させていることを危惧していた社会改革主義者たちにとっても重要なテーマであった。[25]

フォン・グルーバーは講演の中で、酒は食品ではなくて、感覚を麻痺させる作用を脳に及ぼす麻酔剤であると論証した。つまり身体は飲酒によって労働に必要なエネルギーを得るが、酒のエネルギー収支は他の食品と比較すると極めて数値が低い。なぜなら、酒気をおびた身体は調整がきかず、効率の悪い動きによって多大なエネルギーを浪費するからである。したがって酒から得たエネルギーのうち肉体労働のために使えるのはその四分の一に留まるという。さらに、他の食品からカロリーを摂取した方がはるかに安価であるとも指摘した。同じ値段で比較すると、ジャガイモはアルコールの七・五倍、小麦なら五倍のカロリーが摂取できた。つまり、労働者はアルコールを消費することにより差し迫って必要なカロリーを得られなくなるため、アルコールが労働者のエネルギー源になるという主張は、**経済的な見地から見てナンセンス**であるというのである。[26]

酒造業界にとって、これはもちろん破壊的な意見ではあったが、だか

らといって自分たちに都合のいいようにフォン・グルーバーの講演を利用することをやめはしなかった。ビール醸造業界は、フォン・グルーバーが酒はエネルギー源であることを認めたために、反飲酒派の急先鋒がついに酒の栄養価を認めた、とわかりやすい主張をした。そしてさらに「アルコールの栄養価」「アルコールの名誉回復」「液体パン」などといったタイトルの記事を新聞に載せた。

これまでビールの**適量**摂取に、その**健康上**異議が唱えられていたが、きわめて高い評価を受けている禁酒運動の主導者や大学教授たちも、その論拠がないことを認めた。「ビールは液体パンである」という主張は、完全に正当なものとなった。[27]

ビール業界は、このようにフォン・グルーバー教授の啓蒙努力を曲解し、そこから教授の意図した主張とは正反対のものを生み出すことに成功した。フォン・グルーバーはひどく怒って「私の講演を、まるでビールの『適量』摂取を正当化しているかのように曲解し、さらには、私をまるで改宗者サウロ［キリスト教抑圧者から改宗して、熱心なキリスト教徒となったとされるパウロ、訳者補足］に仕立て上げ、『ビールは液体パンである』と認めたかのように見せかけているとしたら、すべてが**いかがわしい記事**と言わざるを得ない」[28]と、述べている。

フォン・グルーバーとビール醸造組合との摩擦は、マックス・ホルクハイマーとテオドア・アドルノが「啓蒙の弁証法」と名付けたものの陳腐な例であろう。二人はこの用語で近代の啓蒙プロジェクトの内的矛盾を表した。つまり理性や啓蒙が人間の解放へと発展していくことへの期待を否定し、新たな非理性的な神話が求められるようになるのである。[29]

酒造業界が、医学的啓蒙をどのようにその対極をなすものにすり替えたかを示す例は、フォン・グルーバーが巻き込まれた論争だけにとどまらない。フォン・グルーバーのミュンヘン大学の同僚であった精神科医エミール・クレペリンも似たような経験をした。第一次世界大戦中、食料不足問題を打開するために、ドイツ政府は酒の生産と販売を厳しく規制した。アルコール消費量について述べるなら、一九一八年にバイエルンで消費されたビールの量は、一九〇六年の消費量のわずか一五・一％に留まった。[30]

酒造業界にとって、この傾向は脅威だった。そこで酒造ロビイストたちは、クレペリンのような反飲酒派の医師たちへの攻撃を強めた。そして、酒はたとえ最小サイズの瓶であっても摂取した人やその子や孫には有害である、というクレペリンの「誤った教義」は、全くもって間違いであると主張した。例えば「過剰な禁酒運動に対するドイツ抵抗連盟」の広報責任者であったペーター・シュヴコフ（Peter Schwuchow）は、第一次世界大戦中に帝国宰相ベートマン＝ホルヴェークに宛てた手紙に次のように書いている。「実際に健康被害が見られるのは、発酵業者が製造した有益で健康に良い製品［酒類］が乱用された場合のみです。[31]もしもクレペリンの批判が当たっていたとしたら「最後のドイツ人は百年前にすでに身も心も砕けて墓に沈んでいたに違いありません。だがドイツ民族の本質は、敵地にいる精神的にも身体的にも未だかつてなかったほど強力な百万の軍勢にあるのです」。[32]

抵抗連盟はまた、クレペリンを公然と攻撃した。バイエルン王ルードヴィヒに宛てた手紙では、一九二〇年代のドイツにおける精神医学の拠点となるべきドイツ精神医学研究所（Deutsche Forschungsanstalt für Psychiatrie）の所長にクレペリンが指名されることを阻止しようとした。

すなわち、クレペリンのアルコール研究は偏見に満ちているため、「優秀な医者たちからも、人を惑わすものであり、不十分であると評価されている[33]」などといった事実無根な内容でクレペリンを弾劾した。「彼の論文は許しがたい方法で酒と精神病を関連付けたが、そのことから、抵抗連盟は別の『アルコール研究部門』の設立に関心をもつようになった。そこにはクレペリンとは反対に『学問的な派閥に影響されない』研究員だけが採用されることになっていた[34]」。

クレペリンはこうした動きを、自分の学問的な評判を落とし、清廉潔白である自分への信用を失墜させようとする企てと見た。さらに、抵抗連盟の活動を、「自分に都合のいいように研究に対して影響を及ぼし、気にくわない結果に圧力を加え、学問を望む方向に駆り立てようとする利益を追うグループの不当な企て[35]」の例であるとした。抵抗連盟はそれに動じることなく、（ビール醸造業連盟がマックス・フォン・グルーバーに対して行ったのと同様に）クレペリンや他の研究者たちの主張を正反対にねじ曲げた。

しかしながら、クレペリンはそれでもなお事態を楽観し、酒造業界がいくら工作を企てたところで、所詮、医学的な啓蒙と学術的な知性にはかなわないであろうと考えていた。「酒造業界はしぶとく暴威をふるい私を責め立てるが、それは明らかに**学術研究**に責任を負わせる巨大な権力だ」。クレペリンの予想では、学術研究を自らの道具として利用しようとする酒造業界の試みは、非難され失敗に終わるはずであった。「全ての利己主義的な隠蔽工作に対して必ず勝利を収めるはずだという一**つの真実**のみが存在する[36]」と固く信じ込んでいた。

だが、互いに相容れない学術的な真実がいくつも存在するとしたらどうであろうか。または、学術的な啓蒙にも様々な形態があって、それぞれが異なる真実を公表するとしたらどうだろうか。酒造業界は非常に巧みに、医学的啓蒙者の啓蒙戦略を手本にして、飲酒による危険性のなさを証明するかのように思える疫学上のデータを公表した。

エミール・クレペリンは、晩年になって健康に関する啓蒙運動の効果について不信の念を表した。彼は二〇年以上に渡り、ただの一度もアルコールに関する批判的な論文を、著名な新聞雑誌に掲載できなかったことを認めざるを得なかった。逆に酒造ロビイストたちは何の問題もなく、アルコールに関して肯定的な記事を、高級紙の様々な欄に載せることができた。一例をあげるなら、『ミュンヘン・ノイエステ・ナッハリヒテン（*Münchener Neueste Nachrichten*）』のチェスのコーナーは、八〇歳のチェスプレイヤーの素晴らしい成績を「酒の力」によるものであると推測した。このプレーヤーは「生涯にわたっておびただしい量の酒を飲んでおり、酒が優れた健康維持の薬であることを実証した」が、その一方で、彼より若いが下位の対戦相手は、当然のことながら「徹底した禁酒家」であった[37]。

【付記】

本稿は、二〇一八年一一月一一日に同志社大学今出川キャンパス至誠館三階会議室で開催されたミヒャエル・ハウ氏（モナシュ大学教授）のドイツ語による講演会の原稿を、本誌掲載用に加筆修正し、日本語に翻訳したものである。翻訳に当たっては、服部いつみがテキストを全訳し、服部伸が専門用語等をチェックした。

注

（1）本稿は、以下の既発表論文を日本での講演用に加筆、短縮したもので

ある。Michael Hau, “The Dialectic of Medical Enlightenment. War, Alcohol Consumption, and Public Hygiene in Germany, 1910-1925.” *History* (2019), pp. 149-168. 同志社大学での講演会開催の労を執ってくださった服部伸教授に、心からお礼申し上げる。

（2）Michael Hau, *The Cult of Health and Beauty in Germany. A Social History, 1890-1930*. Chicago: University of Chicago Press, 2003.

（3）多様な領域に分類される生改革運動の一つ一つについて詳しい文献を提示することは避ける。食生活改革全般に関する研究については、以下の文献を参照のこと。Corinna Treitel, *Eating Nature in Modern Germany. Food Agriculture and Environment c. 1870 to 2000*. Cambridge: Cambridge University Press, 2017. また、飲酒問題と関連する生改革運動による飲酒批判については、Cornelia Regin, *Selbsthilfe und Gesundheitspolitik. Die Naturheilbewegung im Kaiserreich (1889-1914)*. Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1995, pp. 187-190; Wolfgang R. Krabbe, *Gesellschaftsveränderung durch Lebensreform. Strukturmerkmale einer sozialreformerischen Bewegung im Deutschland der Industrialisierungsperiode*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1974, pp. 39-45.

（4）Michael Hau, *Performance Anxiety. Sport and Work in Germany from the Empire to Nazism*. Toronto: University of Toronto Press, 2017.

（5）Rudolf Burckhardt, *Alkoholismus und Volksgesundheit. Ein Wegweiser durch die wissenschaftliche Sonderausstellung Alkoholismus auf der internationalen Hygieneaustellung zu Dresden 1911*. Berlin: Mäßigkeitsverlag, 1911, p. 62.

（6）“Ein Blick auf den Stand der Abstinenzbewegung, ” (Der Deutsche Brauerbund, Oktober 1912), Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde, R 1501, Nr. 116379, Zitat Bl. 147.［　］は著者による補足。（太字は原史料でのイタリック強調部分）

（7）Francesco Spöring, “’Du must Apostel der Wahrheit werden’: Auguste Forel und der sozialhygienische Alkoholdiskurs, 1886-1931.” Judith Große, Francesco Spöring, Jana Tschurenev (Hg.), *Biopolitik und Sittlichkeitsreform. Kampagnen gegen Alkohol, Drogen und Prostituion 1880-1950*. Frankfurt: Campus, 2014. p. 116; James S. Roberts, *Drink, Temperance and the Working Class in Nineteenth-Century Germany*. Boston: Allen & Unwin, 1984, pp. 7-8, 107 and 119; Hasso Spode, *Die Macht der Trunkenheit. Kultur- und Sozialgeschichte des Alkohols in Deutschland*. Opladen: Leske + Budrich, 1993, pp. 204-6; Roberts, *Drink*, Kap. 4.

（8）“Ein Blick auf den Stand der Abstinenzbewegung, ” (Der Deutsche Brauerbund, Oktober 1912), Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde, R 1501, Nr. 116379, Bl. 148.［　］は著者による補足。

（9）Spode, *Trunkenheit*, pp. 224f.

（10）シュナプスボイコット運動については以下を参照のこと。Roberts, *Drink*, pp. 95-107.

（11）R. Ponickau, “Kaiser Wilhelms Stellung zum Alkohol.” Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde R 1501, Nr. 116379, Bl. 381-389; Hans von Oehlschlaeger, “Kritische Beiträge zur Alkoholfrage.” Ibid., Bl. 486-493.

（12）“Ein Weck- und Mahnruf unseres Kaisers. Ansprache S. M. des deutschen Kaisers an die Fähnriche der Marine bei Einweihung der Marineschule in Mürwik, 21. Nov. 1910.” Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde R 1501, Nr. 116379.［　］は著者による補足。

（13）Gustav Stresemann, *Die Entwicklung des Berliner Flaschenbiergeschaefts*. Diss. Leipzig, 1900.

(14) Roberts, *Drink*, pp. 108-119.

(15) Spode, *Macht der Trunkenheit*, pp. 204-11.

(16) Ibid., p. 324, Fußnote 96.

(17) "Bericht über das Vereinsjahr Oktober 1910 - September 1911." (Der deutsche Brauer-Bund. Veröffentlichungen, no. 3), Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde, R 1501, Nr. 116379, Bl. 93.

(18) Konrad H. Jarausch, *Students, Society, and Politics in Imperial Germany. The Rise of Academic Illiberalism.* Princeton: Princeton University Press, 1982, pp. 243-62.

(19) "Wie urteilen deutsche Universitäts-Professoren über die Forderungen der Abstinenz?" Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde R 1501, Nr. 116380.

(20) "Alkohol u. Krankheit in neuester wissenschaftlicher Beleuchtung." Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde R 86, Nr. 1691.

(21) Deutscher Abwehrbund gegen die Ausschreitungen der Abstinenzbewegung (Hg.), *Sollte nicht doch der Alkoholismus ein Schutzmittel gegen Tuberkulose sein?* Berlin, 1916, in Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde R 86, Nr. 5186.

(22) Johannes Orth, "Alkohol und Tuberkulose." *Berliner Klinische Wochenschrift* 53.30 (1916), pp. 822-825.

(23) Ibid., Zitat p. 825.

(24) Abwehrbund, "Alkoholismus ein Schutzmittel," pp. 4, 9, 12-13.

(25) Max von Gruber, "Die Kränklichkeit und Sterblichkeit der Bierbrauer in Berlin und Leipzig und die Kampfesweise der Deutschen Brauer-Union." *Die Alkoholfrage* VII (1911), pp. 324-343.

(26) Ibid., Zitat p. 326.（太字は原史料でのイタリック強調部分）

(27) Ibid., Zitat p. 328.（太字は原史料でのイタリック強調部分）

(28) Ibid., Zitat p. 329.（太字は原史料でのイタリック強調部分）

(29) Max Horkheimer und Theodor W. Adorno. *Dialektik der Aufklärung*. Frankfurt: Fischer, 2005 (1944).

(30) Karl Kreiner, "Alkoholwirtschaft und Alkoholismus in Bayern unter besonderer Berücksichtigung der Einflüsse des Weltkrieges." Deutsche Forschungsanstalt für Psychiatrie in München (Hg.), *Die Wirkungen der Alkoholknappheit während des Weltkrieges*. Berlin: Springer, 1923, p. 11.

(31) "Deutscher Abwehr-Bund an den Reichskanzler." (29. August 1916), Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde R 1501, Nr. 116381, Zitat p. 5.（傍点は原史料ではゴシック線強調部分）

(32) Ibid., Zitat p. 9.

(33) Emil Kraepelin, "Alkoholgewerbe und Wissenschaft," (Sonderdruck Internationale Monatsschrift zur Erforschung des Alkoholismus und Bekämpfung der Trinksitten (1918)), R 86, Nr. 5188, Zitat p. 1.

(34) Ibid., Zitat p. 2.

(35) Ibid., Zitat p. 8.

(36) Ibid., Zitate p. 31.（太字は原史料でのイタリック強調部分）

(37) Emil Kraepelin, "Alkohol und Tagespresse." Deutsche Forschungsanstalt für Psychiatrie in München (Hg.), *Die Wirkungen der Alkoholknappheit während des Weltkrieges*. Berlin: Springer, 1923, pp. 197-208, Zitate p. 207.

(Prof. Dr. Michael Hau：オーストラリア・モナシュ大学教授
はっとり　しつみ・翻訳家／はっとり　おさむ・同志社大学教授)